

博士論文の和文要旨

論文題目	知り合い間の雑談に見られるナラティブにおける相互行為 —日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面の比較—
氏名	夏 雨佳

本研究では、日本語母語場面と中国語母語場面、および日本語母語話者と中国人日本語学習者が参加する日中接触場面において、知り合い同士の二者会話の雑談に現れるナラティブの特徴を明らかにした上で、3つの場면을比較分析し、相違点が生じる原因を探った。その上で、日本語の会話教育で扱うナラティブの指導学習項目、および学習者と母語話者による「相互の歩み寄りの姿勢」(岡崎 1994)を提案した。

研究課題として次の5つを設定し、分析・考察を行った。

- 課題① 雑談に見られるナラティブの定義と認定基準はどのように整理できるか (第3章)
- 課題② 日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面に見られる話題とナラティブの全体像にはどのような特徴があるか(第5章)
- 課題③ 日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面に見られるナラティブの種類にはどのような特徴があるか(第6章)
- 課題④ 日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面のナラティブの開始部と先行話題における語り手と聞き手の相互行為にはどのような特徴があるか
(第7章)
- 課題⑤ 日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面のナラティブの終了部と後続話題における語り手と聞き手の相互行為にはどのような特徴があるか
(第8章)

本研究は10章から構成される。以下、各章の要点を記述する。

第1章では、本研究の研究背景について「雑談に見られるナラティブにおける相互行為と人間関係の形成」、「母語場面と接触場面におけるナラティブ」、「雑談におけるナラティブと話題の関連性を見る必要性」、「知り合い同士の雑談会話」という4つの観点から整理した上で、本研究の目的を述べた。

第2章では、本研究に関連する先行研究について、「ナラティブの研究の歴史的変遷(英語場面)」、「ナラティブの機能と種類に関する研究」、「ナラティブの開始部に関する研究」、「ナラティブの終了部に関する研究」、「相互行為における連鎖組織と話題・発話の単位」という5つの観点から概観した。先行研究の限界点を踏まえた上で、本研究の研究課題を5つ設定した。

第3章(課題①)では、先行研究におけるナラティブの定義と認定基準を整理した。まず、ナラティブの定義については、先行研究(Labov 1972; Bamberg & Georgakopoulou 2008 など)

を参考にし、「経験した出来事、他人から聞いた噂話、想像しながら予測する未来の出来事について雑談の中で語るもの」とした。

次に、ナラティブの語り部の認定基準の項目を 5 つに整理し、BTSJ(宇佐美監修 2022)の 3 つの日本語母語場面の雑談データをもとに分類した。その結果、以下の 2 点が明らかになった。

- (1) 項目①「少なくとも 1 つ以上の出来事について説明している」、項目②「時間的順序のある 2 つの節(行動)、および時間的順序または因果関係を表す接続表現がある」、項目③「現時点の会話から出来事の時点への転換を表す表現がある」、という 3 つの項目が必須項目として妥当であり、かつ 3 つの項目が全て含まれていない場合はナラティブとして認定することが難しいと判断された。
- (2) 項目④「語りの前置き表現がある」、項目⑤「出来事の登場人物の発話を引用する表現がある」については、ナラティブの前後の話題や詳細さの程度によって省略される場合があるため、任意の項目であると判断された。

第 4 章では、本研究で扱う会話データの収集の概要、および会話参加者の概要を述べ、本研究の分析の枠組みを述べた。会話データは、日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面の 3 つの場面の二国会話をそれぞれ 4 つ、計 12 個収集した。各会話の参加者達の関係は、「同じ部活、授業活動などに参加したことがある」といった共有体験を持つ親しい知り合いの関係とした。会話データの処理と分析に当たり、会話データの文字化方法と発話、話題・大話題、および第 3 章で整理したナラティブの認定基準を説明した。その上で、本研究で扱うナラティブと話題・大話題の関係を明確にした。

第 5 章(課題②)では、日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面における雑談から抽出した話題とナラティブの全体像を示し、ナラティブと先行話題の連鎖の特徴を明らかにした。その結果は、大きく以下の 2 点にまとめられた。

- (1) 日本語母語場面では、大学生活や専門に関する悩み相談の話題が中心であったのに対して、中国語母語場面では、人間関係に関する話題が中心であった。また、日中接触場面では、母語場面のような大学生活や人間関係に関して深く議論するような話題は観察されなかった。
- (2) 連続するナラティブにおける語り手の交替の有無によって、大話題で一人の語り手が連続していくつかのナラティブを提示する「同一話者連続」、および大話題で語られる連続するナラティブに語り手の交替が見られる「話者交替連続」の 2 種類に分類された。日中接触場面では、学習者が「同一話者連続」でナラティブを語る割合が高いことが分かった。

第 6 章(課題③)では、日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面におけるナラティブの種類の特徴を分析し、結果は以下の 2 点にまとめられた。

- (1) 話題とコミュニケーション上の機能(①関説的機能、②心情的機能、③動能的機能)の観

点からナラティブの種類を分類した結果、「a.情報伝達」(出来事の内容や客観的事実を伝えるための①関説的機能を持つもの)、「b.感情表明」(出来事発生時の気持ちを伝えるための②心情的機能を持つもの)、「c.意見表明」(先行話題の内容に対して同意・不同意を示すための②心情的機能を持つもの)、「d.働きかけ」(先行話題の内容を踏まえ、会話相手を説得する、慰めるための③動能的機能を持つもの)という4種類が見られた。さらに、ナラティブは必ずしも4種類のいずれかに分類できるというわけではなく、重複したり相互関係を持ったりしているということが分かった。

- (2) 本研究で収集した3つの場面におけるナラティブの種類の出現頻度と割合を分析した結果、日本語母語場面の雑談に見られるナラティブの種類は他の場面より多様であることが分かった。

第7章(課題④)では、日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面におけるナラティブの開始部と先行話題に着目し、そこに見られる語り手行動と聞き手行動を分類し、その出現頻度と特徴を比較分析した。その結果、ナラティブの開始者によって、ナラティブの開始部を「語り手から開始するもの」、「聞き手から開始するもの」、「共同語り手として開始するもの」という3種類に分類した。

まず、「語り手から開始する開始部」においては、語り手行動として、「①開始の標識を用いる」、「②出来事の概要を示す」、「③出来事に関する感情を示す」、「④時、場所、人物などの状況を示す」、「⑤聞き手の既知情報を確認する」という5種類が見られた。出現頻度を比較した結果、3つの場面に共通して「①開始の標識を用いる」、「②出来事の概要を示す」、「④時、場所、人物などの状況を示す」の3つが高い割合で使用されていることが分かった。ただし、中国語母語話者と比べ、日本語母語話者による「①開始の標識を用いる」という語り手行動は他の言語行動と共起することが圧倒的に多いことが分かった。一方、それに対応する聞き手行動として、「①うなずき/笑い」、「②相づち」、「③コメント」、「④言い換え・繰り返し」、「⑤確認要求」、「⑥情報要求」、「⑦φ」という7種類が観察された。出現頻度を比較した結果、日本語母語話者が「②相づち」を圧倒的に多く使用しているのに対し、中国語母語話者は「①うなずき/笑い」を使用する割合が高かった。また、日中接触場面において、学習者が聞き手となる際に、ナラティブの開始部で用いる聞き手行動の種類は比較的少なく、沈黙や無反応も多く観察された。

次に、「聞き手から開始する開始部」では、聞き手による「①情報要求」と「②確認要求」という2つの聞き手行動によってナラティブが引き出されることが観察された。ただし、日中接触場面においては、学習者が聞き手として母語話者のナラティブを引き出そうとしている例は見られなかった。

さらに、「共同語り手として開始する開始部」では、共通の知識や経験を持つ参加者同士がナラティブに関する感情や評価のコメントを述べた後で出来事の詳細を述べ始めるという特徴が、日本語母語場面と中国語母語場面ともに見られた。しかし、日中接触場面で

はこのような開始部の特徴は観察されなかった。

以上の分析結果から、日中接触場面のナラティブの開始部に観察される学習者の聞き手としての反応の薄さや沈黙は日本語能力の影響もあるが、中国語母語の習慣の影響も受けているのではないかという点を指摘した。

第8章(課題⑤)では、日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面におけるナラティブの終了部と後続話題に着目し、語り手行動と聞き手行動の種類とそのやり取りのパターンを分類し、その出現頻度と特徴を比較分析した。その結果、まず、終了部における聞き手行動は、「①非言語」、「②相づち」、「③コメント」、「④補足情報確認・要求」、「⑤φ(沈黙・反応なし)」の5種類、およびそれに応じる語り手行動は、「①非言語」、「②相づち」、「③感想」、「④補足語り(情報提供)」、「⑤φ(沈黙・反応なし)」という5種類が観察された。

次に、語り手行動と聞き手行動のやり取りという観点から、終了部を、「協働型」(やり取りが2回以上あり、後続話題へ移行するもの)、「一方型」(聞き手行動のみで後続話題へ移行する)、および「ゼロ型」(聞き手行動も語り手行動も見られないまま後続話題へ移行する)という3つのパターンに分類した。さらに、各パターンでは語り手と聞き手の行動の下位分類として、「協働型」の中には、「a.コメントー承認や感想」、「b.情報補足要求ー補足語り」、「c.相づちー承認や感想」の3種類が見られ、「一方型」には、「d.コメント」、「e.相づち」、「f.非言語」の3種類が見られた。

さらに、終了部における語り手行動と聞き手行動のやり取りのパターンの出現頻度と特徴を分析した。その結果、日本語母語場面のナラティブの終了部では、ナラティブで語られた出来事に対して聞き手が「②相づち」や「③コメント」をしたり、語り手と意見交換したりして長いやり取りの終了部を協働構築した上で、後続話題で共感を示すための類似体験を語る様子が見られた。一方、中国語母語場面では、聞き手がナラティブに関して、「④補足情報確認・要求」をした上で「③コメント」をするという特徴や、聞き手が語り手のナラティブに対する「③コメント」をするだけでなく、自身の類似体験の感想を「③コメント」として述べるとともに、後続話題で自身の類似体験を提示するといった様子が見られた。

第9章では、本研究の分析で明らかになった日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面に見られる語り手と聞き手の相互行為の特徴を踏まえ、雑談における話題内容とナラティブの種類、および開始部と終了部における語り手と聞き手の協働構築という2つの面から総合的に考察を行った。その知見をもとに、学習者と母語話者による相互の歩み寄りという観点から、学習者・母語話者・日本語の会話教育に対してそれぞれ提言を行った。

第10章では、本研究の結論をまとめた。今後の課題として、以下の4点を挙げた。

- (1) 語り手と聞き手がナラティブを構築する際に用いるうなずきと笑い以外の非言語行動も分析する。

- (2) 学習者の日本語レベルが異なる場合と、日本語母語話者が学習者との接触経験が異なる場合に、それぞれが参加するナラティブに見られる相互行為の特徴をより詳細に分析する。
- (3) 雑談以外の会話場面に見られるナラティブの特徴を分析する。
- (4) 先行研究と本研究から得られた知見を日本語の会話教育の授業活動に導入し、学習者に意識させるという「研究と実践の連携」(中井 2012)を行う。

参考文献

- 宇佐美まゆみ監修 (2022). BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)2022年3月 NCRB 連動版. 国立国語研究所, 機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」
- 岡崎敏雄 (1994). 「コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化」『日本語学』13(12), 60-73.
- 中井陽子 (2012). 『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』東京：ひつじ書房.
- Bamberg, M. & Georgakopoulou, A. (2008). Small stories as a new perspective in narrative and identity analysis. *Text & Talk* , 28(3), 377-396.
- Labov, W. (1972). The transformation of experience in narrative syntax. *Language in the inner city*, 354-396. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.